

問題傾向のある生徒の指導事例

一家出とその後の登校拒否

稲葉 徹郎*

連帯性のない家族関係の中から友人関係に適応できなく精神的主体性を失い、ついに家出に走り、その後家庭に内在する要因を中心に学校、友達、警察等の重圧にたえかねて登校拒否となったA子について、その外的要因を整理し、教育相談を通してA子を理解し、援助することによって本人の発達段階に適した変容を期待した2ヶ年間の実践記録である。

I 目的

年々無気力な生徒が増えつつある現代高校教育の中で次々とおこる問題を目のあたりにした時、これを軽視することができず、正面からぶつかり、生徒の人格を尊重したかかわり方により、好ましい問題解決の道をめざすことを研究目的とした。

II 対象生徒と問題行動の概要

1. 対象 高等学校3年生 女子 A子

2 問題行動の概要

ふだんはめだたないが、時に人の意表をつくようなものを身につけたことがある。当校では冬期間体育の授業がすべてスキー授業になる。A子はスキー技術に自信がないが、表むきだけは目だちたい気持ちから服装、装備に不満を感じていたが家計、家族間の連帯感が思うようにいかず悩んだ結果、〇月〇日のスキー授業を拒否するため朝から無断欠席した。翌日は無断欠席をただされるのをおそれるあまり、(日曜日を間にはさんだこともあり)より深刻に考えた。そして月曜日朝、父親から小遣金として、7,000円をもらい(いつも使用目的はいわない)、M駅から急行に乗り家出に走った。

当日午後、東京浅草警察に補導され保護された。翌日警察より家庭に連絡があり母親がむかえに行き帰宅したが、家出をし、警察に保護されたという自らの行為に対する重圧にたえかね友達、学校とのかわりを拒否し、自分の部屋に入り家族と対話せず、始業式まで約55日間の登校拒否に入った。家出直後、ホームルーム主任、生活指導主任、養護教諭が相談し指導方針を検討し、その直接の指導を教育相談係に依頼された。

3. 本人をめぐる状況

(1) 家族、生育歴

父親、農商学校卒業 農業 母親、尋常高等小学校 会社員(臨時勤務)
次女、小学校5年生、成績良好 三女、小学校3年生、成績良好
祖母、無職

女3人姉妹の長女、父親は5年前から軽い中風で思うように農作業や小供のしつけができず常にやきもきした生活である。病気の前は部落の班長等をつとめ部落の人達からは信頼の厚い方であった。

* 県立新井高等学校

母親はどちらかというと甘く、放任的である。祖母は父親にいつも同情的で夫婦のトラブルの時等常に父親のかたをもつ、さらに祖母と母親は子供のしつけをめぐってのトラブルは常にたえない。

子供から見た両親は消極的拒否不一致の傾向が強い。この中で育ったA子は中学入学以後、祖母、母親とは少しは対話があったが、父親には口をきくことは少なかった。家庭の中心は常に祖母であり、祖母が一家のすべてをきりもりしている。従って子供の教育、生活のしつけは両親以上に祖母の影響が強いように考えられる。

※農業経営規模 水田 85a 畑 35a ※通学はバスで40分

(2) 知能

一年次 京大NX—知能検査 IQ 104 段階 3

所見 学習活動不十分、生活態度は良い。

(3) 学習成績

一年次、二年次の英語の科目が不認定、下位の中、現代国語の成績はよい。

(4) 性格

内向性が強く、集団生活にどうしてもとけこめない。社会情勢には無関心で、友人関係はきわめて少なく、かぎられている。従って常に不安感が高く、憂うつな生活である。神経質で時に“アッ”と思うほどきらびやかなものを身につけ、注目をあびたがる。

(5) 学校での状況

性格的な暗さということから、級友に不信をかけている。集団行動は動作がにぶく、人の後に追従すること多い。教科指導上での人間関係は、時にスムーズに行っていることがあるが、自分のことになると、一歩後退してしまう。パーソナリティの不均衡が外へ表われ、積極的、活動的でないが、反抗の気持ちが表に出ることが時にある。

(6) 読書傾向

多種類、多方向を手当たり次第に読む傾向がある。

Ⅱ 実践の記録

1. 指導方針

A子の家庭では祖母の権限が強く、嫁の立場の母親は姑の機嫌を取りながら行動し、いまだに親としての立場を家庭内に位置づけることができない。A子にとって両親は本来の役目を果たせず、両親に代って祖母がいるという関係である。祖母は口うるさく、人前で嫁のわる口を平気でいう。又子供のしつけ等はすべて自分がしているように思いこんでいるが、問題がおきるたびに両親を批判する。本人との面接というよりその前に両親・祖母とのかかわりを強めて家族間の人間関係をスムーズにし、家庭内の欠陥を取り除くことによっての変容をはかりたいと考え、次のような指導方針を打ち立てた。

(1) 学級主任、生徒指導主任、養護教諭と教育相談係と何回となく指導打ち合わせを行い、一貫指導を最重点におく、直接のかかわりあいを経営相談係とする。

(2) A子との個人的な触れ合いを大切にする。

(3) 家庭へのかかわりを重視する。

(4) 受容的な態度で面接を重ね、家族集団への適応を助ける配慮をする。

2 指導の経過

○クラス主任よりA子家出の報を受け、直ちにクラス主任、生徒指導主任、養護教諭、教育相談係で基本的な指導体制及び指導方針の検討会を持った。

○第一回家庭訪問の報告会を兼ねて指導打ち合わせ会議を開き、次のような事項を決定した。

- ・生育歴よりみて慢性型と判断し、指導は長期を要すると思われること。
- ・外部には秘密厳守で臨み、今回の欠席は病欠取扱いとすること。
- ・家庭訪問を重ね、自己中心的な欲求を自己統制できるよう努めること。
- ・登校した場合は、他生徒と同一態度で接すること。

○その後、科部会で、教科成績の面で、1、2欠点があることから、今後の学習成績があやぶまれるとの意見があったが、生徒指導部として、A子の現在の様子を尊重するよう要望した。

3 家庭訪問と本人との面接

(1) 家族とのレポートづくり

第一回から第七回の家庭訪問の期間中、A子は部屋にこもり、食事は母親の運ぶもののみをとって、家族とは対話もない状態で、A子とは直接面接することができなかったため、父と祖母の面接をくりかえし、家族とのレポートづくりをめざした。

○第一回……父、祖母共に家族関係の不満をうたえる。殊に父は、若くして病気持ちとなり、家計の主たる責任者となれず、子どものしつけにも自信をもってあたれなかったという。

○第二回……祖母は母親(嫁)のだらしなさ、愛情不足が、A子を悪くしたと言い。父は声を荒げて祖母をなじり、食事も満足にとらないA子のからだを心配して、不安の色かくしきれない様子であった。

○第三回・第四回……父、祖母共に気持ちの変化が認められない。

○第五回……父はA子の将来について、「よい就職があれば良いが……。」と心配する。

○第六回……教育相談係の私がリードをとり、学校教育の意義について話し合うが、父は、「先生の話を聞いていると、自己反省から自己嫌悪に陥るが、ここから立ち直りたいとは思わない。」と強い調子で言い切った。

○第七回……父と祖母と私とまったくA子のことをはなれ、世間話をした後、A子のことにふれると、父が、「A子がこんなことして、先生にはご迷惑かけました。A子が、こんなことしたのも、私ら家の親の責任ですわね。」と寂しそうに、しみじみと言い、祖母もだまってしまう。三人が、それぞれにA子のことを思っていることが続かなかった。父と祖母の面接を終え、帰りがわ、A子の部屋に向って声をかけたところ、今までの話を聞いていたような気配があり、改めて、A子の指導に意欲をかきたてられた。

(2) 登校拒否後、はじめての外出と、登校まで

第八回めの家庭訪問の時、母親とはじめて面接をした。「A子のことは、先生にお願いするよりは

かにたよるところがないので、お願いします。」と、口数も少なかった。父親とは事務連絡後、世間話をしての帰りぎわ、A子の部屋に向かって「かぜひくなよ。」と声をかけると、部屋の中から「先生。」とA子のはじめての返事があった。すかさず父親が、「おまえ、今、先生に声をかけるくらいなら、もっと早く出てきて、先生に挨拶すればいいんだねか。」と、大声を出したため、A子の声はとだえてしまった。私はA子と話をしたい気持は山々であったが、その気持ちをおさえて帰宅することにした。今まで重ねて来た家族とのラポートづくりが、A子の心を開く結果になったのだと考えられる。

その翌日より、A子は登校拒否後はじめての外出をすることになった。

○3月29日 親友B子の熱心なさそいで、N町のB子宅を訪問した。

○4月1日 T市在住の伯母(父親の妹)の呼びかけで、B子と共に伯母宅を訪問し、N市まで出かけている。A子は4月1日より4月6日まで伯母宅に外泊。その間、伯母はA子の気持ちをときほぐすように話し相手になってくれ、家に居ずらいようなら、T市に来て、ここから登校してもよいとすすめてくれた。

○4月8日 登校拒否後、はじめての登校をした。

現在まで無欠席である。

それまで、A子自身の内部にむけられていた目が外部に向けられたのである。

(3) 呼び出し相談から自主来談へ

登校直後は、顔色は青白く視線も定まらないで、無理に気を引き立て、いつも二三の級友のあとについて行動をとっているが、コミュニケーションはまったくない状態であったが、次第に、私とは視線をあわせるようになってきた。

5月に入ると、廊下ですれちがいざま、笑顔を見せるようになった。下旬には、下校時きまって廊下で、待っていて、「先生、さようなら。」と挨拶して帰るようになっていった。それからしばらくして、「先生、私、今度行ってもいいですか。」と言ってから帰ったことがあったので、呼び出し相談をした。私の方からリードをとり、教科学習で困っていることはないかと聞いてみたところ、返事がなかったもので、まだふれられるのを恐れているなど判断して、話題をかえ、親友B子の様子をきいたり、T市の伯母宅のことを聞いてみたりして終わりにした。

6月には中間テストを受けたが、全科目とも無事パスした。呼び出し相談で、よく勉強しているようだねと言うと、ことばはなかったが、うれしそうだった。

7月になると、B子と共に自主来談にやって来た。社会科の学習で、グループ研究を課され、どうにか活動していることや、日増しに進路(就職)のことが心配になってきていることなどが話題となり、級友とのコミュニケーションもできるようになったことが感じられた。

9月に入って、自主来談にやってきた。顔色もよくなり、一見したところ、今までのように無理に気を引き立てている様子もなく、夏休み中にB子と野尻湖へ遊びに行ったことや、T市の伯母の家族とN市へ行ったことなどをときれることなく次々と話した。進路のことについて聞くと、はじめは口ごもっていたが、母は地元におきたいと言っているけれど、自分は、東京方面に行きたい希望があるので、B子の協力を得て、やっと家族にも理解してもらい、今は、東京のテパートを受験することに決めたと

話した。

現在、東京のあるデパートに就職が内定している。

Ⅳ まとめ

A子との出会いは、昨年倫理社会を受け持ったことに始まり、今回の指導にと続いた。指導体制の窓口は、教育相談係とし、生活指導部長、養護教諭、学級担任と関係職員一致協力の指導体制と、一貫した指導方針を持って臨んだことが大きな支えになったと言える。

目的としては、A子自身の変容とA子の親の養育態度の変容を図ることであった。家庭訪問では、ややリードを取った面接を行なったところ、祖母からA子の母に対しての不満、A子の行為から近所づきあいでは笑い者にされたことへの不満、父親からは病気持ちの身で家計の中心をにぎれず、子どもの養育態度にも自信が持てない悩みを聞くことができた。面接をくりかえすうち、父親から、A子の行為に、人様のせいではなく、「私ら家の親の責任だ。」という言葉が聞けるようになっていった。

A子は母親との精神的な結びつきを望んでいるが、常に母親と祖母の葛藤を感じるなかで、根深い人間不信に陥っていったのである。しかし、A子は、上記の様な家族の声を耳にし、次第に、心を開いていったものと思われる。私と家族との信頼感・連帯感が、その後のA子との接触に大きな影響を及ぼしたと言えるであろう。

また、実際には登校拒否であったA子を、校内の厳しい反発にあいながらも、病欠欠席の取り扱いとし三年生に仮進級させ、終始受容的態度で臨むという指導方針を貫いたことが、A子の登校を容易にさせたと言えるであろう。

第一学期の、A子の読書傾向を、目的・意義、さらに領域別に見る時、極めて多種類・多方向のものを選んでいると言える。青年期は精神活動の旺盛な時で、手当たり次第と言う傾向はないとは言えないがその傾向とは一種特別に異なっている面があるといえる。精神状態が不安定の故か、心にうかんだ事柄や現実の悩みを映ずる活字を見るとそのとりこになったり、他人の一言片句を気にし、懸命に問題の処理に悩んでいると思われる。しかしそれは、単に利己的な解決であって、問題解決の常道に反する面がないとはいえない。このような読書傾向の分析を得た今、本人とのラポートをより深め、解決すべき問題点をうきばりにしていくための長い指導が肝要と思われる。

それに加えて、1年生次・2年生次と、教科学習の面で、2科目欠点を取っており、あと一科目欠点を取ると、校内規定により、原級留置という不安があるため、学力の面での強力な援助・指導が必要である。

休んでいた間の学力のおくれや、それとないうわさや、級友の好奇心に耐えているA子の悩みをこれ以上のものに深めない配慮をし、A子の好ましい変容をかぎりなく可能なものにしてゆきたい。

家族との面接の記録を読み返して思うことは、ロジャースの非指示法に徹しきれず、いたるところで教師臭さが顔を出していることに気づかれる。8月28日の第8回家庭訪問時、はじめてA子が、「一言「先生。」と、私に心を開いてくれた場面は、私が、父親とはじめて共感的立場になり得た直後のことであったことから、それまで、カウンセラーとしての技術や形式にこだわり、身がまえていた私自身の

あり方について一種複雑な思いにかられてしまった。

このころから、私のA子の内面への真の接近が始まったと言えるし、A子が自らの内面にのみとられ、外面に目をむけることがなかった時点では、私は旧態依然とした教師感覚と、真のカウンセラーに変容したいと願う心の起伏の中に揺れ動いていたのではないだろうか。

クライエイトが、立ち直るきっかけをつかむのは、まったくささいなことからであろうと思うのだが『カウンセラーは自己の明確化なしにクライエントに対する援助などありえない。』ということの事実をこの家族を通して強く学んだように思われる。

これからが、『カウンセリングの深化に向かって、クライエントとしての私の歩みが始まる。』というのが、現在の私の偽らざる心境である。

私が、この数年間、求め続けてきたものは、教師の態度を民主的なものに変えることによって、自らが学ぶ力を育てるという方法であった。本人と家族とかかわった過程で、大きな壁につきあたり、試行錯誤したこともあったが、こんな時、課題解決の糸口を示唆してくれたのは、共に歩んできた、両親・祖母・A子であった。

そのことを感謝しつつまとめとする。